

---

# 研究の経緯と成果・課題

---

久留島 浩・小島道裕

## I 研究の目的

歴史民俗系・民族系の博物館展示においては、他者の文化を展示という形で表象することになるが、近年そのこと自体の問題性が問われており、また自文化とされるものも、歴史を遡れば、ある時点からは異文化とせざるを得ないことも認識されはじめている。しかし、当館（国立歴史民俗博物館、以下ここでは歴博と略）の展示においては、このことはほとんど自覚されてこなかったように思われる。列島上に生きた人びとの生活文化を展示で示すというとき、こうした人びとの「文化」をどのようなものだと考えたらよいのか。このような問い掛けに少しでも前向きに応えるためには、具体的な展示の場を設定し、展示というもっとも表象性の強い行為を行うこと自体の持つ意味を検討することが不可欠である。そこで、現在リニューアルを計画している第3展示室において、近世の国際交流についての展示計画（「国際社会のなかの近世日本」）を具体的事例として、この問題についての研究を行いたい。その際、展示をする内容そのものの検討、展示意図を来観者に伝えるための方法、来観者と展示を考案する側との関係性などについて、できるかぎり統一的な視点から議論する場を提供することで、新しい博物館研究のあり方についても模索したい。

具体的には、まず16世紀～19世紀の日本と東アジアにおいて、「日本人」が「他者の文化」をどう認識していたか、また「外国人」や「他民族」が「日本文化」をどう認識していたのかを究明したい。

そして、このような「歴史的異文化認識」を展示として表象する方法とその際の問題点についても研究する。とくに、現在博物館で大きな課題となっている、展示と教育プログラムを通じて観客との間で実現されるべきコミュニケーションのあり方についても重視したい。実際にプログラムを付した展示を考案するとともに、その評価の方法についても検討を行いたい。

## II 研究の経過

### 【研究組織】

(◎研究代表者、○館内事務担当者)

氏名	所属・専攻	研究分担
菊池 勇夫	宮城学院女子大学学芸学部・近世史	アイヌ民族からみた「日本」
島村 恭則	秋田大学教育文化学部・多文化主義民族学	在日朝鮮人から見た異文化

鶴田 啓	東京大学史料編纂所・近世史	日朝関係論
君塚仁彦	東京学芸大学・博物館学	博物館展示論
村上紀夫	大阪人権博物館・近世芸能史	「身分差別」展示の課題
宮坂正英	長崎純心大学人文学部・日蘭関係史	オランダ人からみた「日本」
豊見山和行	琉球大学教育学部・琉球史	琉球からみた「日本」
吉原秀喜	二風谷アイヌ文化博物館・アイヌ文化	アイヌ展示の課題
浦川和也	名護屋城博物館・日朝関係史	日朝関係史展示の課題
並木美砂子	千葉市動物公園・社会教育（歴博客員）	博物館教育
青山宏夫	本館歴史研究系・歴史地理学	地図からみた異文化認識
一ノ瀬俊也	本館歴史研究系・近代史	近代における戦争の表象
岩淵令治	本館歴史研究系・近世史	近世都市の異文化表象
◎久留島 浩	本館歴史研究系・近世史	総括・博物館展示論
○小島道裕	本館歴史研究系・中世史	中世における異文化・博物館教育
樋口雄彦	本館歴史研究系・近代史	近代における戦争の表象
山本光正	本館歴史研究系・近世史	長崎貿易からみた異文化
大久保純一	本館情報資料研究系・美術史	絵画資料中の異文化表象
日高 薫	本館情報資料研究系・美術史	輸出漆器からみた異文化
藤尾慎一郎	本館考古研究系・考古学	考古学からみた異文化表象
内田順子	本館民俗研究系・民俗学	琉球からみた「日本」
安室 知	本館民俗研究系・民俗学	民俗学からみた異文化表象
佐藤優香	本館情報資料研究系・博物館教育	博物館教育

#### 【研究会の記録】

##### (1) 平成15(2003)年度

・第1回研究会 2003年6月28～29日 於：国立歴史民俗博物館

久留島浩「共同研究の計画について」「歴博総合展示第3展示室のリニューアル計画について」

島村恭則「展示の中の日本と韓国－韓国国立『民博』における共同開催展示から－」

鶴田啓「統一政権と対外関係」

・第2回研究会・現地調査 2003年10月23～26日

長崎奉行所跡・唐人街・出島 解説：川口洋平（長崎県教委）

長崎市立博物館 解説：原田博二（長崎市立博物館）

名護屋城博物館常設展示および特別展示「四つの窓と釜山」に基づく研究会

解説：浦川和也 展示へのコメント：菊池勇夫，豊見山和行

名護屋城跡

##### (2) 平成16(2004)年度

- 
- ・ 第1回研究会 2004年6月26日 於：国立歴史民俗博物館  
村上紀夫「身分制から見た近世絵図の読解（試論）」  
青山宏夫「地図に見る異文化・異地域へのまなざし」  
久留島浩「歴博総合展示第3展示室のリニューアル計画について」
  
  - ・ 第2回研究会・現地調査 2004年12月10・11日  
沖縄県立博物館調査，および那覇港図屏風に描かれた場所の調査  
研究会「那覇港図屏風の世界」於：浦添市美術館  
小野まさ子・謝敷眞起子（沖縄県文化振興会公文書管理部料編集室）「那覇港図屏風の世界（1）  
－浦添市美術館本を中心に－」  
岩崎奈緒子（京都大学総合博物館）「那覇港図屏風の世界（2）－京大本と滋賀大本の比較から－」  
久留島浩「歴博の展示プランと観客が感じる琉球像」  
コメント：豊見山和行
  
  - ・ 公開研究会「観客から博物館を見る－研究をどう見せるか－」2004年12月4日 於：国立歴史民俗博物館（総合研究大学院大学と合同）  
久留島浩「歴史展示と観客との間」  
竹内有理（国立歴史民俗博物館非常勤研究員）「利用者の視点から歴博を評価する」  
宇治谷恵（国立民族学博物館）「国立民族学博物館における入館者動向調査等の現状と課題－入館者サービスの視点から－」  
並木美砂子「『展示意図の伝わり具合測定』と『来館者を理解すること』のはざまに見えること」  
永山智子（佐倉市美術館）「美術系博物館における観客と展示－体感する美術の通信簿－」  
安達文夫（総合研究大学院大学／国立歴史民俗博物館）「展示の意図と来館者の理解－定量的評価の試み－」「インターネットによる電子展示とその評価」
- (3) 平成17（2005）年度
- ・ 第1回研究会 2005年6月26日 於：国立歴史民俗博物館  
久留島浩 他「歴博総合展示第3展示室『国際社会の中の近世日本』リニューアル計画の検討」  
吉原秀喜「アイヌ民族の表象とアイヌ民族による表象－北海道二風谷における事例を通じての考察－」  
佐々木利和（文化庁）「オムスクで発見された平沢屏山の作品について」
  
  - ・ 第2回研究会・現地調査 2005年9月17～18日 於：北海道平取町立二風谷アイヌ文化博物館・北海道開拓記念館  
両博物館の展示調査および担当者と意見交換。解説：吉原秀喜  
開拓記念館において，研究集会を開催（第3展示室リニューアル委員会と合同）  
久留島浩 趣旨説明
-

---

1 「蝦夷国魚場風俗図巻」(北海道開拓記念館蔵) について

谷本晃久 (北海道教育大学)

林昇太郎 (北海道開拓記念館)

2 「松前屏風」(松前町教育委員会蔵) について

菊池勇夫

岩淵令治

3 「江指浜鯨漁之図」(函館市立函館図書館蔵) について

宮原 浩 (江差町生涯学習センター内郷土資料室)

田島佳也 (神奈川大学)

・ 国際セミナー「歴史展示との対話－記憶をつなげば市民が生まれる?－」

2005年10月6日 於：国立歴史民俗博物館

ヴィヴ・ゴールドディング (英・レスター大学)

「身体化された知識：頭と手と心を用いたワークショップ」

「権力、知識、協和：世代間での回想によるシティズンシップ（市民性）の形成」

田中禎昭 (すみだ郷土文化資料館) 「戦争の記憶の継承と対話－東京空襲・記憶の断層から－」

片山勝茂 (日本学術振興会特別研究員) 「市民形成と記憶：日英の比較を中心に」

佐藤優香・井上由佳 (国立歴史民俗博物館) 「博物館における思い出：市民の経験と記憶」

・ 現地調査 2005年12月2～3日 於：長崎歴史文化博物館・九州国立博物館

両博物館の展示調査および担当者との意見交換 (第3展示室リニューアル委員会と合同)

解説：原田博二 (長崎歴史文化博物館), 橋本雄 (九州国立博物館)

・ 第3回研究会 2006年2月23日 於：国立歴史民俗博物館

君塚仁彦 「異文化表象と教育活動－その理念・目的と可能性をめぐって－」

並木美砂子 「“復元”の意義について－学びのありかたへの予備的考察－」

佐藤優香 「ものを媒介にしたコミュニケーション」

小島道裕 「歴史展示における復元模型の意味と活用」

久留島浩 「研究の総括と成果の刊行について」

★この他、非公式集会だが、イギリスのブリティッシュ・ミュージアム日本展示担当者であるティモシー・クラーク氏の来日を機会に、同館での日本常設展リニューアル構想と歴博での異文化表象研究について意見交換を行った (2006年1月19日 於：国立歴史民俗博物館)。これについては、本論集所収の久留島論文を参照されたい。

【研究会の概要】

国立歴史民俗博物館における研究会で、基礎的な問題を議論するとともに、3年間の各年度にお

---

いて、それぞれ中心となる対象地域を設定し、展示における表象の問題と、絵画資料を中心とする資料における表象の問題について、各地域の博物館において現地の研究者とともに研究会を開催して検討を行った。

初年度は、朝鮮半島との関係および、近世日本の「四つの窓」を題材にした佐賀県立名古屋城博物館の特別展示について検討を行った。また、長崎において、新博物館の構想および「寛文長崎図屏風」と現地の遺跡について検討した。

第2年度は、沖縄を対象地域とし、沖縄県立博物館等の展示を調査するとともに、「那覇港図屏風」について、諸本の比較や現地との対比など、絵画資料の表象の問題について集中的な検討を行った。また、観客調査を題材にした公開研究会を開催した。

第3年度は、北海道を対象地域とし、アイヌ文化博物館での展示および「アイヌ絵」や江差等の絵画における問題について検討を行ったほか、初年度に構想を検討した長崎歴史文化博物館および九州国立博物館でも展示と教育活動について議論した。

各年度における各地での検討のほか、公開研究会を開催し、観客調査および博物館における「記憶」の問題について検討を行ない、毎回60名程度の参加を得て、博物館関係者が先端的な問題を討議する場をつくることができた。

### Ⅲ 研究の成果と課題

本研究は、3年間にわたって、以上のような経過で実施してきた。この研究を計画し、運営した者として、研究会や調査のたびに、多くの新しい知見や研究課題を得ることができたことを、まず参加者のみなさんに感謝するとともに、この点については共有できたことを喜びたい。

しかし、「歴史的異文化」という耳慣れないことばを使い、かつ博物館研究とまでリンクさせようと課題を広げすぎたこともたしかであって、消化不良の側面も否定できない。ここでは、まず、本共同研究発足の背景と当初想定した研究上での特色について述べる。それを踏まえて、この共同研究を組織した当館としては何を獲得することができたのか、何ができなかったのか、についても率直にまとめておきたい。

#### (1) 本共同研究発足の背景と当初の位置づけ(課題)

冒頭で、この研究の課題については概要を述べたが、ここで少していねいに、この研究を立ち上げるに至った背景について整理をしておきたい。そこで、盛り込まれた課題が、いい意味でも悪い意味でも、この共同研究の在り方を規定したからである。

第一に、当館で新たに共同研究として立ち上げることを考えたきっかけは、科研「生涯学習時代における博物館教育・教育員養成・歴史展示に関する総合的研究」(基盤研究B2, 2000～2003, 代表佐原真〔～2001年8月〕, 小島道裕〔2001年9月～〕)という共同研究を実施してきたことにある。この成果については、毎年研究集会を行ってその記録を公刊してきたので、そちらを参照されたいが(註1)、この共同研究を進めるなかで、とくに歴史民俗系博物館における展示という表象行為そのものの持つ意味について具体的に検討する必要があることがわかった。「生涯学習時代」に突入して、博物館が果たすべき役割やその可能性はますます大きくなっていると考えが、一方

で、展示の内容を選択・構築する過程での問題点については、研究や資料収集の成果を「展示」という表象手段で公表することそのもの、すなわち表象するという行為そのものの問題性をどのように自覚するか、という課題を投げかけられたままであると言ってよい。また、博物館研究で注目されていた来観者研究のこの時点での成果や課題をどのように検討するか、という点でも宿題が残った。たとえば、①来観者とはどのような存在で、何を観、何を感じて（考えて）帰るのか、②展示する側と展示を観る側との間のコミュニケーションをどのように構築するか、③展示物と展示を観る側との間のコミュニケーションはどうすれば可能か、などについて、具体的な場で（できれば同じ展示や史料をはさんで、その場で）議論することの必要性を痛感した。さらに、歴史・民俗系の博物館としては、「文化」を展示することの意味や問題点、戦争や少数民族、ジェンダーの問題を展示という場でどのように表象しうるのか、についても具体的な研究が不可欠であると感じた。しかも、展示の場・伝える場・コミュニケーションの場からスタートするだけでなく、中身を考える時点から、展示というかたちで表象したことの持つ意味についても考えなければならないし、かつ実際のコミュニケーションのあり方やその成果についても何らかの基準を設定しつつ検討しなければならないことが判明したわけである。その点で、この科研で明確になった問題点を発展的に継承するためにも、歴史・民俗系の博物館である当館内で「博物館総合研究」を立ち上げることが不可欠であると判断したわけである。

第2に、博物館で「他者の文化」を展示することの持つ問題性に注目したうえで、その問題性を対自化し、博物館の場でいかなる「異文化」間の対話が可能か、と問うたのが、1997年から翌年にかけて国立民族学博物館ならびに世田谷美術館で行われた企画展示「異文化のまなざし」であった。この展示および展示図録は、博物館の果たす「フォーラム」としての役割を明確に示した点でも重要で、「自文化」を展示することが国立の歴史系博物館としてごく当たり前のことだと考えていた当館でも大きな刺激を受けた。近代のある時期以前を対象とした歴史展示は、あえて「自文化」とくることができるとしても、ことばであるいは感覚ですぐに了解しあえるようなものではなくなりつつあると痛感していた。そこで、実はこうした時間を超え、ことばや感覚で歴史的経験や記憶を共有できないような「自文化」を「時間的には『異文化』」だと一度捉えてみたらどうかと考えたのである。しかも、実際に、展示の場で、あるいは展示物を囲んでフォーラムができなければならないのではないか、コミュニケーションを経てこそ理解できるのではないか、と考えたのである。そこで、この共同研究では、過去における「他者の文化」の認識の具体相をいかに把握し、時間を超えたために「異文化」となっている「自文化」を展示というかたちでいかに表象するか、を具体的な課題とした。

第3に、当館では、2008年3月に第3展示室のリニューアル、第6展示室の新展示構築、第4展示室のリニューアルという順番で、総合展示のリニューアル（全体としては「新構築」）事業を行う予定である。このうち、第3展示室の大テーマの一つが「国際社会のなかの近世日本」で、近世の国際関係を大きく扱うことになっていた。そこでは、朝鮮・琉球・オランダ・中国・アイヌという国や社会との関係をどのように展示するか、同時代の日本の人々がこうした関係をどのように認識していたか、逆にこうした国や社会に属する人びとは日本人々をどのように認識していたのか、という点についても、あらかじめ検討しておく必要性を感じていた。煮詰まらない言い方では

あるが、近世における「異文化」認識をどのように表象できるか、ということであった。さらに、展示では、「朝鮮との関係」、「長崎における中国とオランダとの関係」、「琉球との関係」、「アイヌとの関係」という四つの中テーマを構想していた（実際には、長崎のコーナーをさらに2つの中テーマに分けた）。これは、1980年代の研究を通してほぼ通説となった、「四つの口」を通して近世日本の国際関係を捉えるという考え方を踏まえたものであるが、それぞれの関係を、①交易や交流の「場」を具体的な画像史料で示すこと、②その関係性を象徴するような事象（たとえば朝鮮通信使や琉球の使節、あるいはオランダ商館長の江戸登りの使節などの「見える外交関係」）で示すこと、③交易されたものや交流された文化などを具体的かつインパクトを与えるかたちで示すこと、などに留意した。そこで、後述するように、この研究会の運営にあたっては、当初から、第3展示室の「国際社会のなかの近世日本」の展示プロジェクトメンバーの参加を求め、両者が合同で研究会や博物館調査・現地研究会などを開催できるように企画した。

第4に、当館で取り組みが遅れていた博物館活動（教育など）については、1998年から5年間「教育プロジェクト」という館内教員を中心とするボランティア集団に対して、歴博における「博物館教育活動」のあり方を「試行的」に検討することが認められた。ここでは、まずたとえば学校団体の見学プログラムや「親子クイズ」という家族向けの見学プログラムを作成したり、「先生のための歴博講座」を開催するなど、具体的な教育普及活動を行なった。そのうえで、こうした活動を通して歴史民俗展示を構築する側から、来観者に何をどのように見せればよいのか、そのような展示をした成果はどのように検証しうるか、など、博物館として不可欠な実践的研究課題の発見とその解明にもつとめてきた。この成果については、毎年の活動記録をまとめた『れきはくへ行こうよ』を参照されたいが、さらに、そもそも来観者とはどのような存在なのか、展示から何を考え、感じて帰っていくのか、ということについては、来観者調査・研究という新たな研究課題の設定と持続的な検討が必要であることもわかった。この「教育プロジェクト」は、上記の科研ともリンクさせながら、博物館における展示（表象）や博物館教育・来観者調査やその評価方法などについての実践的調査・研究を進めてきたが、2003年度までで解散することになった。そのため、この実践的教育・研究活動を引き継ぐことも、本研究の課題として追加せざるをえなくなった。この4番目の課題を入れることで、現在当館の基盤研究で「博物館学的統合」というジャンルになっている共同研究が、はじめて館内で認知されることになったという点では意義があると考えられる。しかし、本来組織や研究方法については分けて実施すべき研究テーマまでも、そのままこの共同研究のなかに含み込むことになり、とくに本来は館の責任で行なうべき実践的活動の受け皿にもなったために、この点で多くの時間と労力をとられたこともたしかである。この反省にたつて、現在では、業務として博物館教育活動や来観者調査を行う組織（広報サービス室および広報連携センター）がつくられることになった。

## (2) 研究を進めるうえで留意したこと、およびこの点での成果

実際に、研究を進める上で留意したのは以下の3点である。すでに述べたことも含まれるが、本研究の特色であると言い換えてもよい点である。

①「異文化」を表象している実際の博物館展示をめぐる議論を共有することである。

②同時代の「異文化」認識を示すうえで情報量の多い画像資料をとりあげ、議論を共有することである。

③第3室リニューアル委員会の「国際社会のなかの近世日本」部分を担当するプロジェクト委員と一緒に調査・研究活動を行うことである。

このうち、①については、まず、実際に「異文化」の展示をしている博物館を見学し、展示を担当した学芸員や地元の研究者との研究交流を行うことで、「展示」することの持つ意味や問題点について考える機会を、以下のようなかたちで持つことができた。[1]この時点では開館していなかった「長崎歴史文化博物館」の展示構想と開館後の実際の展示との比較を行った。[2]「四つの窓」(名護屋城博物館企画展示)を見学し、展示企画者をはさんで議論した。[3]アジアのなかでの九州の歴史的位置づけを展示のうりものとして開館したばかりの九州国立博物館の展示を見学して議論した。[4]沖縄では、沖縄県立博物館、北海道では、北海道平取町立二風谷アイヌ文化博物館・北海道開拓記念館の展示を見学し、これをめぐって議論した。

そこでは、(ア)現在の少数民族の問題も意識しながら議論する場合、括弧つきであれ「異文化」とひとくくりにしてよいのか、とくに本研究会がアイヌの人びとの生活や文化を「異文化」をしてしまってもよいのか、という疑問も出された。また、(イ)現在の教科書における「異文化」の表象のされ方に注目し、一般の市民がどのような認識を持っていて、それが展示によってどのように変わるのか、など、異文化展示と観客との間のコミュニケーションのありかたについて実践的に考える必要性も指摘された。

①の具体的な画像史料をはさんで、地元の研究者と研究会を開催するという点では、半ば公開の研究会を数度現地で実施することができた。たとえば琉球であれば、名称は異なるものの「那覇港図屏風」として一括できるような屏風が数点存在するが、その精細な画像が揃っていなかったこともあって、比較研究は始まったばかりであった。そこで、現在確認されている画像のうち、5つを高精細なデジタル画像にして、比較研究の条件を整えようとしたのである。しかも、このデジタル画像については、所蔵館との間で、データを共有し、かつ高精細画像をはさんでその絵解きをすることを踏まえた議論の場を設定した。また、アイヌの表象については、「松前江差図屏風」「江差浜鱈漁之図」「蝦夷国魚場風俗図絵巻」をとりあげて、議論した。そこでは、同時代の人々にとって「異文化」(他者の文化)がどのように表象されるのか、ということから議論をスタートした。とくに、高精細の画像資料を使うことで、何が、どのように描かれているのか、という点では、有意義な意見を交換することができた。さらに、「アイヌ絵」と通称されるものについての議論も行われ、「和人」からの一方的なまなざしのもとで、「アイヌとはかくあるべし」として描かれた絵画史料から、当時の人びとの「異文化」認識を導き出してよいか、という疑問も出された。この点は、本研究が「異文化」を、研究課題のなかで「分析概念」として使用していることの持つ問題性とも関わって、重要な指摘である。「アイヌ絵」と呼ばれるものが「土産物」として広まることの持つ意味も無視できない。「想像されるとおりの、期待どおりの」アイヌ像がそこには描かれる可能性が高いからである。この点では、近代以降の映像資料でさえ、「いかにもアイヌらしい生活」が撮影されるという一方的なまなざしの持つ問題性を無視することはできない。しかし、同時に、いつからこうした「期待どおりの表象」を行うようになるのか、逆説的な言い方だと、いつから「異文化」として理解さ



れ、表象されるようになるのか、その時期や契機は何か、という点の解明も不可欠である。本研究は、こうした「異文化」の形成過程についても視野にいれて議論しようと考えたわけである。

②については、こうした研究成果を展示にどのように反映させるか、という点できわめて実践的な意味を持つ。それは、第3展示室のうちの「国際社会のなかの近世日本」というコーナーで、ここで議論したことをどの程度反映できるか、ということに留まらない。2006年12月には、2週間にわたって、長崎に関する「試行展示」を行った。その前に、近世の対外関係についてのアンケート調査を行っており、「鎖国」と「長崎出島」=オランダとの交易、という流れで連想やすい「近世の長崎」イメージ「鎖国」イメージに対して、どのような揺さぶりをかけると来観者が展示と対話を始めるか、という観点から観客調査を実施したのである。この調査の「成果と課題」については、別に公表する機会を持つ予定だが、中国との交易の持つ意味を17世紀末以降の交易の場となった「唐人屋敷」とともに示すことで、来観者の「鎖国」イメージが少し「開かれたもの」になったと考えている。もっとも、実はリニューアル前の長崎の展示箇所でも、中国貿易の比重を重視した展示になっていたのだが、解説が少なく、鎖国イメージを強く出していたために、結果として観客の印象に残らなかったものと思われる。いずれにしても、こうした点を踏まえて、新しい展示構成や解説の在り方を模索する必要性が明確になった。

### (3) 残された課題や改善されるべき問題点

次に、上述した3点をも踏まえ、自己批判的な観点から、残された課題や今後改善されるべき問題をいくつかあげておきたい。

まず、「異文化」を歴史展示の場で表象すること自体の持つ問題性について、できるかぎり具体的に検討するという課題を設定したことに関してである。この点では、「異文化」をどのように扱うかについての、参加者間での議論が必ずしも十分でなかった点が大きな問題であった。冒頭でも述べたが、歴史・民俗系博物館における「異文化」の表象の在り方をめぐって議論しようと考えたのは、人類学のなかからきわめて自省的に出されてきた「異文化」のとらえ方が、どちらかというと同時代の空間的な比較であったのに対し、ここでは同じ空間での歴史的な比較と過去の人びとによる「文化の比較」という観点を入れようと考えたからであった。現在のアイヌの人びとや在日朝鮮人の人びと、沖縄の人びとの生活や文化をア priori 「異文化」として捉えることを意図しているわけではなく、まして、現在もなお、「差別」に苦しむことが少なくない、江戸時代以降身分差別を受けた人びとを、「文化として異なる」などと強調する積もりは毛頭無い。現在・未来の問題も含めて、ここで「異文化」ということばで彼ら・彼女らの生活や文化を表現すること自体が持つ危険性が、多くの参加者から表明されたが、こうした「他者性」が強調されるにいたる歴史的経緯について十分な議論をすることができなかったことは率直に認めたい。

そもそも、「文化」概念でくくること（あるいはその歴史過程）自体が、「自文化」を自己認識し、その範囲でのアイデンティティを形成することに関わってきたことはあらためて言うまでもない。「異国」「異人」「異文化」を認識するなかで、自らの国や文化的主体あるいは「自国の歴史と文化」を想像的につくりあげていく過程が、近代国民国家の形成と深く関わることは想定できる。しかし、それが、いつから、どのような契機で、あるいはどのような条件下で始まるのか、については検討

すべき課題が多く残っており、本共同研究でも、こうした点での議論は十分ではなかった。ロナルド・トビ氏がすでに指摘しているように、「江戸図屏風」「東照宮縁起絵巻」「朝鮮通信使歓待図屏風」などでの朝鮮通信使の絵画上での表象や「洛中洛外図屏風」に定着する画像が、決して「現物を写真的に表現したものではない」にも関わらず、しかも、17世紀前半の権力者が中心であるにせよ、新たな「自国意識」が現れたことを示すのではないか、という点は重要である（註2）。そして、いったんそれなりに写実化された画像は、実際の朝鮮通信使の行列が、一定の「拝見の作法」は強制されるものの、実質的にはあらかじめパンフレットが作成されるような「見世物」となる。それが、都市祭礼の仮装行列に取り込まれるなかで、今度は民衆的な視点から、あらためて「異人」（唐人）化されて表象されるようになるのである。このなかで、どのような「自国意識」が生まれるのか。このような「異人」「異文化」表象そのものの歴史的形成過程をめぐっても課題は山積している。

ここでは、常に「異文化」を括弧つきで表してきた（同時に「自文化」についても括弧をはずすことは容易ではない）。実態をそのまま反映するのではなく、そうした認識が生まれることの持つ意味を明らかにするための「方法概念」として捉えることができなかつたかと思えたのであるが、この点をも含めて踏み込んだ議論はほとんどできなかった。

\*そもそも「文化」というかたちで、ある人びとの思想や行動あるいは生活をつにくることにについての疑念は常に持っている。「くくる」ことは、何か「本質的なもの」があることを前提に「一方的に抽出する」行為を経なければならない。その視線は、どうしても一方的になりがちで、いかに「双方向的」であろうとも、また人類学で実施されているように実際の人びとといかに深く生活を共にしようとも、いったん研究の対象とした時点で、この「制約」から逃れることは難しい。「共生」や「相互理解」と言っても、その関係が歴史的にも、現在もなお、「平等」であるかどうか、そこに権力関係が無いといえるかどうかは疑問である。

しかし、歴史民俗系の博物館では、ある物語のもとに、展示を構成しなければ、展示ができないこともたしかである。過去の人びとの生活文化を展示することが、さしあたり歴博の展示の中核であり、この展示行為は、ある「文化」を示すこと、もの資料で文化を表象することにほかならない。博物館の展示とは、この行為を避けて通るわけにはいかない。一つの「文化」ではなく、文化の多様性や変化をその側面をどのように展示で表現できるか、について考え続けていかなければならない。そして、その展示を挟んで、展示の対象となった側と展示をした側とが（このような展示をする側とされる側という二分法も見直すことがすでに始まっている）、観客も巻き込んで議論することができる場を設定すること（展示を準備する過程から実際の展示を実現する過程まで、さまざまな局面で）が不可欠であろう。

なお、「過去」の人びとは、その展示に直接異議を唱えることはないから、展示をした側と展示の対象となった「過去」の人びととの間で葛藤は生まれえない。そのために、資料を収集・分析して展示を考案したわたしたちは、一般の来館者よりは「専門性」が高いこともあって、同業者（研究者）以外からの批判を受けることはほとんど無かつた。しかし、今後、歴博では、直接に異議申し立てをする人びとが生存している現代展示を構築することになっている。歴博にとっては、歴史としての「現代」をいかに展示するかは、言わば今後の歴史系博物館としてのあり方に関する根本的な問題である。この共同研究では、こうした点にまで踏みこんだ議論をしたかったが、これも今後の課題である。

最後に、海外で「日本文化」が展示されるときに、今後どのように関わるか、考えてみる時期に来て

いることを痛感する。その際、意外に見落とされがちで、深刻な問題は、海外の博物館で「日本展示」なるものを見る日本人の「自文化」認識のあり様かもしれない。「日本（文化）」展示なるもの前で「着物や鎧・兜・刀、あるいは扇子や茶道具が並ぶのを見るとホッとする」というような声を実際に耳にした経験が何度かあるが、自らを日本人だと考え、日本文化とは何かと問われると、意外にステレオタイプ化した答えしか出てこない。お箸の文化だとか、屏風・掛け軸の文化、あるいは米の文化などと言う人もいるが、いずれも日本の固有な文化だということはきわめて難しい。逆に言うと、自らがそのように考えている「日本文化」が、そのまま海外の博物館に展示されていることに違和感を覚えない日本人観光客は決して少なくないのではないか。日本刀を観て一番喜んでいるのが日本人だったりする。こうした海外向けの「日本文化」なるものが、実は日本人にとっても「日本文化」だと認識されているとすれば、ここでは日本文化という「異文化」はどこに行ったのであろうか。こうした日本人自らの「日本文化」=自文化認識の形成過程そのものも、大きな研究課題として残されていることになる。

次に、これもすでに述べてきたことではあるが、近代のある時期以前の歴史は、もはや「異文化」として考えた方がわかりやすいのでないか、という点についてである。「連綿と」「伝統的に」続いてきたと言われる諸現象が、実は近世後期以降に（とくに19世紀を中心に）「創出された」あるいは「発見された」ものであることは少なくない。しかし、この折角「発見された」諸現象だけでなく、それ以前から継承されてきた景観や生産技術・道具も含めて、戦後まで残されていたものが、この2、30年の間でいかに変化・消滅したことであろうか。その代わりに、どのような「住みやすさ」「暮らしやすさ」を得たのだろうか。最近流行りの「電化住宅」に象徴的なように、「エコ」をうたい文句にしつつも、その電気を生み出すところで実際に進む環境破壊には口をつぐむ。一部で、おもに観光のため、あるいは世界遺産にするために、その景観を護ろうという動きがないわけではないが、多くの過疎地では、多くの人びとが自分たちの住む地域を「特色が無い」と感じ始めているのではないか。当たり前のことだが、実際には、それぞれ個性的な歴史や文化を含む地域的特性を持っていたにも関わらず、それを継承することができなくなっているということである。それは、情報に関わる産業が、アツという間に、いたるところで、わたしたちに、「均質な社会」のなかで生きているのだと思いこませてきたからでもあった。実際には「格差」が不可逆的に進行しているから、もはやこの点を隠すことはできなくなっているにもかかわらず、気がついたら、ほんとうは「格差」は助長されたまま、「格差是正」という名のもとに、かつての地域的な特性を持った生活文化の多くはほとんど維持・継承できなくなりつつある。

さらにもう一つ、「異文化となった過去」について、事例をあげておこう。過去において確実に使われた道具たちの歴史である。道具そのものは全国各地の歴史民俗博物館をはじめとしてそれを残そうという努力をしているが、道具はそれを使う技術が伴わなければ、使い方さえわからないし修繕さえできない。この間、急速にこうした技術を継承する人たちが減少し道具を持った歴史的意味を「ことば」だけでは伝えることができなくなりつつある。博物館のなかの「民具」がどうなりつつあるのか、想像してみたらよい。場所を占め、朽ちていくことをひっそりと待っている民具たち。このように言うわたしも、歴史民俗系博物館が、今それをどうすればよいかわからない。ともかく、「今、廃棄する」という判断をすることはないが、見通しのない「こののち」に期待するだけである。もちろん、道具や技術は所詮歴史的な制約を持っており、ある時間やある空間でのみ現実的な意味

を持ったにすぎず、変化していくものであって、たまたまこの最後に残った道具や技術を未練たらしく保存しようとしているのにすぎない。人間の歴史とはそのようなものだ、と言われるかもしれない。しかし、こうしたことも含めて、過去が「異文化」としてしか認識できなくなりつつあるのではないか。それでは、現在の「自文化」とは何のことだ、という重い課題も含めて、今後、こうした目に見えない技術や伝承をも含めた歴史的資源の収集やそれを踏まえた調査・研究・展示による表象を任務とする博物館にとって、残された課題は大きい。

なお、これは、研究会運営上での問題でもあるが、多くの方に研究会で有意義な報告をしていただくことができたにもかかわらず、「歴史のなかの異文化」というテーマの設定をめぐる議論とその総括が十分でなかった。研究会の場に出された課題をも含めて、新たに明確な執筆のための課題を設定し直して報告者各自に依頼するという「研究的循環」の流れをつくることができなかった。そのため、豊かな内容を持った刺激的な多くの報告を論文というかたちにしていただくことができなかった。さらに、「異文化」については、それこそ外国の研究者と共同で議論する場を設定したかったが、第3展示室リニューアル委員（監修者）であるロナルド・トビ氏以外には十分な議論を行う場がなかった。もっとも、この点は、人間文化研究機構の連携研究などの場では実現されており（註3）、本共同研究がこうした連携研究が生まれるきっかけになった点は評価できる。

最後に、この共同研究での成果についても紹介しておきたい。博物館研究に当たる部分については、2度にわたって、外部に開かれた研究集会を開催することができた。2004年12月に実施された公開研究会「観客から博物館を見る－研究者はどう見せるか－」では、展示を考案する研究者の視点と観客の視点がどのように交錯するか（しないのか）、その関係性について議論をすることができた。また、2005年10月の国際研究集会「歴史展示との対話－記憶をつなげば市民が生まれる？－」では、歴史系博物館が果たす「過去の記憶の継承」の問題を、「戦争の記憶」の問題と関わらせて議論できたことは有意義であった。この場では、日英の博物館における「市民形成」の上で果たす役割の違いをめぐる議論も行われた。市民を国民と置きかえることができるかどうかについてはさらに議論する必要があるが、少なくとも多民族を囲いこみ様々な「格差」が生まれているイギリスで、「市民」を形成するために国の歴史的資源（National Resources）をいかに活用するか、ということをも目的意識的に実践しようとしていることがわかった。この点では、日本の博物館のありかたやそれに責任を負うべき文化行政のありかたとは異なっていると感じた。「国民をつくる」ための博物館という発想に与する積りはないが、長期的な視野で、生涯学習のなかに博物館などの公共的施設や公共的資源を、生涯学習プログラムに組み込むことで、利用者が多様な文化を伝えることがいかに大切か、根本的に考え直す時期に来ているように思われる。

2007年度末には、当館の今後のミッションや今後の在り方についての方向性をまとめた「歴博のめざすもの REKIHAKU：The Future of History」が公表され、そのなかで「博物館型研究統合」という博物館をもつ大学共同利用機関ならではの研究スタイル（ミッション）が強調されている。今後はこの「博物館的研究統合」を自覚した研究が館内で組織的に行われ、そこへの参加者が増えるものと思われるが、博物館研究は当館の研究者に共通する「自分たちの課題」でもあるのである。

#### (4) 本書の構成

本研究の成果は、上記のさまざまな研究会活動そのものの中にも十分に活かされているものと思われるが、活字にできる成果物として、本書に9本の論考を収めることができた。その内容は、大きく、①資料、特に絵画における表象そのものをめぐる諸論稿と、②歴史展示における表象および受容の問題について、博物館における学習やコミュニケーションの在り方など、来観者と展示をつくる側との関係性について論じた諸論考、とにまとめることができる。そこで、以下のような2部構成にした。なお、後者には、第3展示室におけるリニューアル構想、およびこの間歴博において実施してきた教育活動・観客調査等についての研究も含めた。

以下、本書に収められた諸論考について、簡単に紹介しておきたい。

まず、第I部「資料に見る『異文化』」から紹介する。

菊池勇夫「アイヌの御目見（ウイマム）儀礼—小玉貞良『松前屏風』を導入として—」は、18世紀半ばごろの松前藩城下町（福山）を描いた屏風のなかのアイヌの様子に注目し、その図像が描かれる意味について検討する。第3展示室の「国際社会のなかの近世日本」のなかの「アイヌとの関係」展示に関わる研究としてではあるが、この屏風のなかで「松前藩とアイヌとが取り結んでいる『御目見』儀礼の内実」の変化に注目するのである。具体的には、松前城下に来たアイヌの呼びとが逗留する「丸小屋」と「御目見」に焦点をあてて、絵図類から随筆などの文献資料までを博捜し、この「丸小屋」が浜から姿を消したことに注意を向ける。先行研究に依拠して、アイヌが松前城下に来て活発に交易を行っていることを象徴的に示す丸小屋が、商場知行が始まる1640年代ごろから急速に減少することをふまえたうえで、18世紀に制作された松前屏風に描かれたこの丸小屋に象徴される御目見（ウイマム）がそのまま姿を消したわけではなかったのではないかと、以下のように推論する。

ここでとりあげる「松前屏風」自体は、松前の繁栄を描くことに主眼があり、そのことを示すものとして「御目見」のアイヌと丸小屋が点景として描かれる」にすぎない。このことは、商場知行制の展開とシャクシャイン戦争によって松前藩とアイヌとの関係が大きく変化したことをも反映する。この後のウイマムは、次第に政治的支配関係を強めることはたしかだが、このことをアイヌ側の視点から見直すとどのようになるだろうか。城下交易・城下への立ち入りを一方的に禁止するのは藩の側で、御目見（ウイマム）はアイヌ側の継続の意思の現れとして評価することもできるのではないか。

こうした推論を踏まえたうえで、もう一度、「松前屏風」にも表された、アイヌが松前に来たときの一連の様子が読み返される。「ウイマムチブという艤装した船」に乗ってくること、「酋長」が「ハレ着としてのジットク（蝦夷錦）」を着ること、浜辺で逗留する「丸小屋」はいずれも「アイヌ自身のもの」だった。藩主と「手印」を取り交わす継目御札などの儀礼的關係もアイヌ社会の慣習に基づいていること、御目見後に城下での売買は許されたであろうこと、などを考慮するとむしろ18世紀の御目見（ウイマム）は、「アイヌ側の主体的意思の側面」が反映されているという視点から読みなおすことができないか。という氏のこの結論は興味深い。近世を通じて一方的に収奪され、破壊されていくというアイヌ社会の歴史ではなく、そこには近代以降本格的に破壊される前の、自ら選択した生活・生産のあり方があったことに注目する近年の研究と共鳴するものであり、図像の

読み方としても新たな研究上の視点を示すものである。

村上紀夫「渡辺村の構造について－絵図と被差別民－」は、大坂のかわた村である渡辺村が、木津村領内に移転する17世紀後半以前、下難波村領内に存在していたときの空間構造について、移転後との関係も含めて復元しようとしたものである。具体的には、明暦期の景観を描く北組総会所旧蔵の『大坂三郷町絵図』での描写をもとに、先行研究を批判的に踏まえ、由緒書の読みなおしと延宝検地帳の分析とをふまえ、明暦以前の4町と増地となった2町とに分けて、その景観を推定復元する。そのうえで、移転後の景観復元を行い、移転前と後とでその景観が酷似していることにも言及する。こうした仮説を提示したうえで、最後に、文化3年版の「増修改正摂州大阪地図」での渡辺村の描かれ方をとりあげ、内部の構造は言わば実際に見て書かれているにもかかわらず、個別の町名は記されず「穢多村」と一括りに表現され、また他の情報も選択的に描かれたことがわかるとして、こうした「表現の取捨選択」に注目することで、「被差別民への視線と意識を読み解くことができるのではないか」という方法上での問題提起を行っている。

さまざまな資料を精緻に分析することによって、仮説として地形を含めた景観を復元していること自体が、貴重な研究成果であると考えますが、この共同研究にとっては、氏が「はじめに」で述べられたことが持つ問題提起としての意義も大きい。氏は、当初本研究会での課題が「内なる異文化としての被差別民」として示されたことについて批判する。そして、被差別民の「文化」を「異文化」として抽出できるだけの、「外側」（被差別民以外）の人びとにとっての共通する「文化」（自文化）がありうるのか、という問題点を投げかける。その逆に、東西で生業や生活の異なる被差別民の文化をひとくくりの「文化」（異文化）とする想定自体も、結局のところ、「排除・差別を正当化する意識と無関係ではない」と喝破する。この点は、そのとおりだと考える。アイヌの人々の生活文化をア prioriに「異文化」ととらえることの対に「一つの和人の文化」なるものが想定されているのではないかと、という批判とも重なる。そもそも「文化」概念を使うことの問題性もこうした点に顕著に現れるとも言える。この点については、当初は、近代国民国家がつくりあげられる過程で、生活文化をめぐる「差別」（自分たちと異なるという意識）が上から権力的に強制されるのではなく、「国民なるもの」の側からも醸成されていることについても議論すべきだと考えていた。すなわち、「多様性」といいながら、その「共通するもの」を求めていくなかで（それが神話であったり、文学であったり、美術であったりする）、それ以外のものへの「差別」化・「異」化が始まるのではないかと考えていたのである。このこと自体は、仮説的な理解にすぎないにしても、その間の相互関係や歴史的過程については、議論する余地があると思ったからである。しかし、実際の共同研究の場では、議論を深めることができなかつた。その意味でも、今後氏の指摘をあらためて受けとめる必要があると考えている。

岩淵令治「江戸勤番武士が見た『江戸』」は、「紀州藩付家老安藤家家中の江戸勤番武士のための江戸案内書」である『江戸自慢』と金沢藩邸に勤めた儒者海保青陵がはじめて勤番を勤める武士のために書いた『東驢』をていねいに分析したものである。前者は、紀州出身で1年半の勤番生活をした筆者が、新しく赴任する者たちに「田舎者ともてはやされ」ないための書いたものである。寺門静軒の『江戸繁盛記』が前提となっており、これまでも部分的には国元と江戸との比較という点で利用されてはきたが、全体を通した分析は十分でなかつたものである。氏は、その内容を、「江

戸の諸相」と「生活」とに大きく分け、たとえば後者では、さらに言語や食・娯楽と遊山などの項目をたてて、ていねいに分析している。そのうえで、「江戸」については、すでに地誌や文学作品などさまざまな媒体を通じて少なからぬ情報を著者は得ていたが、さらに江戸での実体験を踏まえた国元との比較を行ったと推論する。この国元である「若山」（和歌山）との比較の際には、18世紀末から19世紀にかけて、和歌山でも、『紀州続風土記』・『紀伊国名所図絵』などが相次いで編纂されるなど、地域の歴史や地誌について改めて認識すること（地域や歴史の「発見」）が始まっており、著者自らも「我紀の国」と呼ぶように、自「国」が発見され始めていた。こうした動きを背景にして、「異文化」としての「江戸」と比較することで、「自文化」としての「若山」が「再発見」され、「相対化」されることになるという。

『東躰』については、まず、海保青陵自らが、江戸で生まれたのに、江戸と他国を双方見ることではじめて、「東府ノ夷人」として「江戸」自体が見えるようになったと述べていることに注目して分析を進める。ここでは、しばらく訪れないうちに「江戸」が変化することに気づいた著者の経験から、さまざまな「他文化」を知って「自文化」が理解できるし、こうした「文化」がいかに可変的であるかということも、両方を比較してはじめて理解できるのだという点に注目する。これまで、青陵が「遊歴による地域の相対化や客観化」を行ったことが評価されてきたが、それは彼が「文化」を比較して考察できたからではなかったか、とする。そして、これまであまり検討されてこなかった青陵の「江戸観」に焦点をあてる。具体的には、金沢・京都滞在時代の著書の分析をふまえ、『東躰』の内容を、「江戸有職」・「江戸風俗」・「江戸風」と、「養生」（江戸生活の留意点）の大きく二つに分けて、それぞれ詳細に分析する。前者では、天下の中心としての「江戸」の風俗や流行を知り、摂取することの必要性が、彼の思想上での特色でもある「国富論」の観点から語られ、後者には、彼の江戸生活の経験から、食住上での注意、藩邸外の文化人との交流をすることや江戸の地域認識や治安状況など、江戸で生活するうえでの提言が記されているとする。

以上の分析から、氏は、この二つの著書が、いずれもいわゆる江戸の名所案内ではなく、これまでの印刷物によっては得ることのできない、したがって加えるべき情報について記そうとしていることが共通するという。また、著者の個性や経験は異なるが、いずれも「自文化」を前提とした江戸の表象になっているだけでなく、同時に「自文化」を相対化することで言えば新たな「自文化」（「国風」）を発見しようとしていることである。「江戸」と「国（元）」の違いに注目し、それを「異文化」という視点から読みなおすという点で本研究の課題に新しい論点を提供している。

日高薫「異国へ贈られた漆器－天正遣欧使節の土産物」は、天正遣欧使節がヨーロッパに持ち込んだものを復元的に検討することで、16世紀のスペイン・ポルトガルの東方認識、ひいてはそこで形成されつつあった日本認識に迫ろうというものである。遣欧使節が持ち込んだ日本漆器は、贈った側の記録、もらった側の財産目録、現存する実物と相互に明確に関連づけることが難しく、この時期の日本製漆器の所在に関するたしかな史料も無いなかで、書箆筒・盥・提重・文箱などに注目して論を進める手法は手堅い。この復元的な検討のなかで、日本からのものだけでなく、途中で調達したアジア製品が贈答品に含まれているという興味深い指摘もあるが、具体的には、16世紀前半にはすでに東アジアにおける代表的な土産物として定着していた日本の漆器が、こののち17、8世紀を通じてヨーロッパで流行っていく歴史的過程をあとづけようとしている。漆器そのものは、

すでに東アジアの外交関係のなかで、日本を代表する特産品として位置づけられていたが、中国漆器とはどこか異なるものとして、この日本の漆器がヨーロッパで認知される過程は、日本や日本人が西洋に認識されていく歴史と重なり合うのではないかと、という仮説は本共同研究の趣旨からもたいへん興味深い。

浦川和也「近代日本人の東アジア・南洋諸島への『まなざし』－絵葉書の史的価値と『異文化』表象－」は、絵葉書がその映し出す画像とそれに添えられたタイトル（詞書き）とによって、購買者であった同時代の日本人の「異文化」「異民族」認識の所在を示すのではないかと、という点から、おもに20世紀前半（1900～1920年）の絵葉書を分析したものである。

近年、筆者自らの研究をも含めて大きく進展した絵葉書の研究史を要領よくまとめたうえで、絵葉書が「いかなる史料か」という点に注目して、その史料としての性格（「史料性」）について言及する。そこでは、まず、日露戦争時に新しいメディアとして登場し、それが「不完全な漏らすメディア」でもあったことに注目して、低コストながらも広告価値の高いメディアとして登場したことの意味を問う。1920年代以降、他の多様な画像メディアが展開するなかで、そのニュースメディアとしての（速報性・同時性という意味での）役割を低下させる代わりに、名所絵葉書・プロパガンダ絵葉書として継続するとして、その役割を変化させる過程について、1900年～1920年の絵葉書を分類して詳細に検討する。ここでは、氏自身が博物館で絵葉書を収集・整理・分析する過程で、試行錯誤しつつ実践してきた分類方法や整理方法に基づいて分類が行われており、今後の絵葉書に関する史料論としても大きな意味がある。このような精緻な分類・分析を踏まえて、朝鮮半島絵葉書の風俗絵葉書のうち、とくに「前から、後から、横から」人物を写した絵葉書を取りあげ、博覧会における人間の「標本」化に共通する志向性が見られることに注目した。博覧会もこうした風俗絵葉書も、「人類学的なまなざし」であると同時に「帝国主義的なまなざし」であるが、さらに、アイヌ民族・沖縄・台湾・中国・満州・南洋諸島の風俗絵葉書にまで広げて分析した結果、それがここでも共通することを確認した。と同時に、その「まなざし」は、かつて日本に対して欧米諸国から向けられたまなざしであったことを考えると、日本から日本帝国の支配下・影響下に置こうとしている国へのまなざしと欧米諸国からその植民地に対して向けられたまなざしとを比較すること、日本が多様な民族に対して向けるまなざしが一様なのかどうかを検証することが課題となるとする。

次に第Ⅱ部「展示における表象」に収められた諸論考について紹介しよう。

並木美砂子「博物館の利用者主体の教育論構築にむけて－異文化理解を促す学習論の紹介と提案－」は、日本における博物館教育についての歴史を概観したうえで、博物館教育理論構築にとって有効な3つの学習理論を整理・検討し、歴史系博物館においてもっとも有効だと考える学習理論を提起しようとしたものである。3つの学習理論とはいずれも、博物館では「利用者の主体的な参加や利用が推進されていくべきだ」という、筆者の学習の主体としての利用者の在り方を重視する視点から選ばれる。まず、学習者の主体的な学習を中心に置く「自由選択学習」であり、生涯学習社会における博物館にふさわしいものであるが、利用者の選択や発見・理解という一連の流れのなかで、多様な歴史の見方をすることが認められれば、歴史系博物館でもさらに有効な学習理論たりう



るとする。次に、「正統的周辺参加論」は、学習そのものが学習者が共同体へ参加する過程だととらえるもので、「学びの共同体」から「社会的実践への参加」をも含んだ新しい共同性の獲得のうえで持つ積極的な意味を評価する。博物館にあてはめれば、「あなた展示する人、わたし展示を観る人」という関係から、博物館のさまざまな活動を主体的に担っていく参加者の自己形成過程であると同時に、開かれた博物館へ向かうことを可能とするはずである。最後は、歴史の記述とそのナラティブの解釈を重視する学習理論である。歴史展示で叙述された過去の人びとの生活や彼ら彼女らが生きていた世界と向き合う際、自分と関わらせることで、自己の内面にまで働きかける可能性を持っており、「省察の機会」として働く。氏は、「その時代時代の他国あるいは他文化から自国の扱われ方について知る」という本共同研究の試みは、「自己のナラティブ様式をも客観視してみるという体験」をもたらすとして、歴史系博物館においてこの様式を「意図的に」採用することを提言する。これによって、本共同研究で検討した、「異文化」を展示で表現することの持つ積極的な意味が、さらに新しい角度から付与されたものと考えられる。同時に、表象するという行為の持つ問題性を自覚しながら歴史展示を構築することは不可欠であるが、こうした学習理論と真剣に向き合う（向き合い続ける）こともあわせて求められているのだということを改めて痛感した。

君塚仁彦『「異文化」とされる側の記憶と表象－在日朝鮮人と博物館運動』は、在日朝鮮人によって設立された丹波マンガン記念館と在日韓人歴史資料館について、設立意図や設立過程、展示内容をていねいに紹介するとともに、こうした展示が持つ今日的意義にまで踏み込んで論じたものである。丹波マンガン記念館は、在日朝鮮人で自らマンガン採集労働に従事した経験を持ち、その結果「じん肺」に苦しむざるをえなかった李貞鎬氏が、軍需物資として不可欠であったマンガンの苛酷な採掘労働に朝鮮人、中国人や非差別部落の人々が従事させられたという事実すら抹殺されかねないなかで、1989年に設立したものである。見学できる坑道の一部とともに、一般にはほとんど知られることの無いマンガン鉱山と鉱山労働者の歴史を「土地に刻まれた在日朝鮮人マンガン労働者の記憶」を継承することで記録しようとするところに大きな意義がある。在日韓人歴史資料館は、日本による本格的な朝鮮植民地支配が始まる画期となった1905年の第二次韓日協約制定後100年を意識して、2005年に設立された博物館である。戦後、南北に分断されたことの問題性を意識し、「あくまでも客観的な視点から歴史事実を集めること、すなわち史料中心の立場をとるという基本理念に基づいて」設立され、まさに「在日朝鮮人」が生み出される場所から現在にいたるまでの歴史を展示したものである。在日朝鮮人の一世は言うまでもなく二世の高齢化も進むなかで、労働・生活の実態をも含めた彼ら・彼女らの「生きた証」を伝えるものや記憶も急速に失われつつある。一方、歴史的には、在日朝鮮人の労働や生活に関ってきたはずの地方自治体は、その歴史を積極的に記録・保存しないことで、結果的には歴史のなかから抹殺することになっている。それは、戦争における加害の問題や民族差別・部落差別などさまざまな差別の問題を、「負の歴史」として退けようとする志向性と基本的には同質のものである。君塚論文は、歴史的には「異文化」とされることで差別されたり、「多文化の共生」のなかに、歴史的には何も問題が無かったかのように回収されてしまう、その両方を批判的にとらえ、「在日朝鮮人」というきわめて歴史的に生み出されてきた存在を、どのように記憶していくべきか、この難しい問題に切り込もうとしている。現在もなお、避けて通ることのできない大きな課題としてわたしたちの前につきつけられている「異なる歴史認識」をど

のように展示の場で示すか、という課題として受けとめることにしたい。

小島道裕「歴史展示における模型の意味と活用」は、これまで、歴史系博物館における歴史展示の方法をめぐって積極的に発言してきた筆者が、レプリカと並んで用いられることの多い模型について、どのようにすれば歴史展示にとって有効なのかを、国立歴史民俗博物館での自らの経験に基づいて論じたものである。歴史展示は、大きく「現存する過去の遺品を展示する方向」と、「展示テーマに沿って過去の情景を再現」する方向とに分類できる。前者は、現存する資料は、その資料の内容が持つ豊かさによって、あるストーリーに配列されていても、多様な見方が可能である反面、レプリカを使っても展示全体の体系性という点では無理がある。後者は、一般にはなかなか想像しにくい過去の情景をテーマ的に描くという点では有効だが、所詮、模型を考案した者の固定化した歴史像を越えることはできないため、来観者が自由に過去を向かい合うことを困難にするうえ、そこで示された過去の情景はどれだけ深く考証してあったとしても、「事実」とは言い難いことになる。模型には、複製に近いものからさまざまなデータに基づいて復元したものまであり、また縮小したものと実物大とに分かれるが、歴史展示は、現実の歴史に対する「ビジターセンター」の役割を持つところに意味を見いだした氏にとっては、模型は、「立体的な」展示索引として機能するところに意味を持つという。氏は、模型を展示索引として有効に使用するために、「京都の町並み」という建物と人形が設置された模型をとりあげ、その根拠になった「洛中洛外図屏風」をはじめとする諸資料とリンクさせるデジタルコンテンツを、館内の研究者と協力して考案し、実際に展示の場で試している。その結果、導入や索引といった機能は有効ではあるが、模型そのものの全体像がわかっている作り手と部分しか観ることのできない来観者との間のギャップが決して小さくないことも確認できたと言う。利用者の自由な選択をできるだけ保証しつつも、ある「うながし」や「索引」の提示、「一緒に考える」ことも必要で、この点では、並木論文で、博物館には「利用者の学習機会」をつくるのが責務だとすることとも関わる。「生涯学習時代」と標榜されているわりに、有意義な生涯学習の拠点たりうる博物館が現在ほんとうに大切にされているのか、という危惧を抱くだけに、博物館の可能性とそのため条件整備とはどのようなことかについても、今後考えていく際の有効な素材が提供されたものと評価できよう。

久留島『『異文化』を展示すること・『自文化』を展示すること－歴博と大英博物館の『対外関係』の展示プランを比較して－』は、2006年11月にリニューアルオープンした大英博物館の日本展示に刺激を受けて書かれたものである。この新しい日本展示は、美術品（美術として価値の決まったもの）を時系列に並べる（時系列に並べることも多くはなかった）という従来の日本文化の展示ではない。考古学・歴史学の成果を踏まえて、時期区分を行ったうえで、その時代の特徴を示すという点に力点が置かれており、海外の博物館でははじめての、時系列に添い、かつ固定的な「日本（文化）」イメージからも自由な歴史的展示だと評価できるとする。しかし、日本ではまだ本格的に紹介されていないので、まず、その展示構成と理念について紹介することを目的の一つにしている。同時に、現在進行中の歴博における第3展示室のリニューアルプラン（とくに「国際社会のなかの近世日本」）の展示構成や理念と比較することで、大英博物館にとっての「異文化」である「日本（文化）」が、「自文化」としてはどのように表象されるかという点について検討しようとした。そのうえで、歴史系の博物館にとって、「文化」を展示することの持つ問題性を、今後の博物館の在り方

と関わらせて論ずる。論証という点では十分とは言えず、多くの課題を列挙したにとどまるという恨みはあるが、これからの博物館を考えるうえで必要な論点を提起することにはなっている。その意味では、今後も、博物館の展示についての共同研究がさまざまな場でさまざまなかたちで進められなければならないと考えるが、その際、展示が考案される研究過程やそこで出された研究的論点を展示の場でどのように表象するかという課題や、それをめぐる観客との対話をどのように組織し、どのようにして新たな学習の場とするかという課題を、総合的に、それこそ双方向的に議論する必要があることを痛感した。

(註1) 2002年11月の第41回歴博フォーラム「歴史系博物館の現在・未来」および2003年11月の国際シンポジウム「歴史展示を考える－民族・戦争・教育－」の記録集が、それぞれ『歴史展示とは何か－歴博フォーラム 歴史系博物館の現在・未来－』（アム・プロモーション、2003年11月）、『歴史展示を考える』（アム・プロモーション、2004年12月）として刊行されている。また、1998年以降の歴博の博物館教育活動・博物館研究活動については、歴博から、『れきはくにいこうよ 1998～2000』（2002年3月）、『同 2001』（2003年3月）、『同 2002』（2004年3月）、『同 2003』（2005年9月）、『同 2004～005』（2007年3月）が刊行されている。あわせて参照されたい。

(註2) ロナルド・トビ「朝鮮通信使行列図の発明－「江戸図屏風」・新出「洛中洛外図屏風」と近世初期の絵画における「朝鮮人像」への模索－」（『大系朝鮮通信使』第1巻、1996年、明石書店）。

(註3) 人間文化研究機構総合推進事業「大学共同利用機関における博物館の論理・倫理・技術」（代表吉田憲司）など。なお、機構連携研究「ユーラシアと日本：交流と表象」（代表久留島浩）でも、表象という点に焦点をあてて研究しており、本共同研究とも重なる点は少なくない。とくに、海外調査に際しては、歴史系博物館あるいは歴史的な展示を見学し、できるかぎりそれをテーマにして議論を行うように試みた。この研究のこれまでの経緯と問題点については、『論壇 人間文化』第1号（2007年、人間文化研究機構）を参照されたい。

久留島 浩（国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系）

小島道裕（国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系）